

# 大分県の民俗芸能 (十)

染 矢 多喜男

西国東郡大田村大字俣水一野に鎮座する年神社に伝わった岩戸神楽である。

## 一、番付・演技者・装束

- 1 破ハライレキ儀式 1名。立烏帽子・白直垂・白袴・白足袋。弊をつけた榊。
- 2 礼楽 3名。大太鼓・縮太鼓・横笛・銅鉦子の奏楽。太鼓は大・縮を1名で叩く。
- 3 祭礼 1名。烏帽子・白直垂・白袴・白足袋。扇子・鈴。
- 4 扇 4名。烏帽子・白直垂・白袴・白足袋。御幣・鈴。
- 5 御幣 4名。烏帽子・白直垂・白袴・白足袋。御幣・鈴。
- 6 花神楽 4名。烏帽子・白直垂・白袴・白足袋。扇・鈴。三方の花・米を舞いながら撒く。
- 7 たぶさオサツカ (篠神楽) 2名。長袖の襦袢・法被・白袴・白足袋。笹・鈴。
- 8 結開ケツカイ 1名。赤襦袢・直垂・青袴 (模様あり)・白足袋。鈴を半ばで笹にかえる。
- 9 帯四つ 1名。毛頭・赤襦袢・法被。刀・帯。半ばで帯を禪にとり、刀と鈴で舞う。
- 10 みさき 2名。鬼は毛頭・面・赤直垂・色袴。枝・扇。神主は烏帽子・白直垂・白袴・白足袋。御幣・鈴。
- 11 地割 6名。太郎・次郎・三郎・四郎・五郎王子はそれぞれ青・赤・白・黒・黄の陣羽織様のものを着て、毛頭をつけ太刀をはく。文撰博士は烏帽子・白直垂・長袴 (足首でくる)。御幣を差し、笏を首にさす。扇子箱・扇

- 12 弓の手 4名。帆掛烏帽子・赤襦袢・チョッキ（刺繍してある）・ヒキワリ・色袴。刀を差し、弓・矢。
- 13 小太刀 1名。赤襦袢・チョッキ・ヒキワリ。扇・鈴。ハイシキの上に太刀2本を置いておく。
- 14 岩戸 3名。1名は色直垂・白足袋。笏。大神宮のお札をいただき、ミソギハライをあげる。2名は白直垂・白足袋。御幣・鈴。
- 15 白人<sup>レラト</sup> 1名。烏帽子・面・白直垂・白足袋。御幣・鈴。
- 16 手力雄命 1名。毛頭・面・色法被。櫛・扇。
- 17 拍子神楽 1名。長烏帽子・面・毛頭・色直垂・陣羽織様のもの。弓・矢。
- 18 八重垣 1名。烏帽子・面・色直垂。槍。
- 19 四つ鬼 4名。毛頭・面・襦袢・陣羽織様のもの・色袴。杖・扇。
- 20 大蛇退治 7名。足名椎は烏帽子・面・白直垂。御幣。手名椎は毛頭・面・法被。榊稲田姫はヨウラク・毛頭・面・ウチカケ・素戔鳴尊は帆掛烏帽子・毛頭・面・色直垂。刀を差し、弓・矢（2本）。樽担ぎ（2名）は毛頭・面・色物の陣羽織様のもの。樽を担ぐ。大蛇は鱗を描いた襦袢を着て、大蛇をかぶって出る。花火を使用する。
- 21 二番矛 1名。八重垣に全じ。
- 22 三種神器 4名。思兼命は烏帽子・面・色直垂。笏。石凝止命は毛頭・面・色直垂。櫛・鏡。玉祖命は毛頭・面・直垂。櫛・玉。素戔鳴尊は帆掛烏帽子・毛頭・面・色直垂。刀を差し、櫛・天叢雲劍。
- 23 天鈿女命 1名。ヨウラク・毛頭・面・チハヤ。色御幣・鈴。
- 24 戸隠明神 1名。毛頭・面・法被（下には背に刺繍のある丹前）・手甲・脚絆・ドンス（相撲取の化粧マワシ様のもの）。御幣。

25 七五三切り

26 神祇上げカミ 3名。1名は烏帽子・色直垂・白足袋。笏。2名は烏帽子・白直垂・白足袋。御幣

二、沿革など

江戸時代は神主が舞っていた。明治28年に中の川の諸留ヨシユキヒトツツ（一野に鎮座する年神社のホシヤドン）から、河野吉平・河野佐太郎・河野吉五郎・諸留吉永・小野本照吉・小野本助市・鶴田幸之丞の8名が習った。五郎王子を修業して組員になった順序に氏名を挙げれば、小野本助市・河野勝蔵（現76才）・河野綱太・植田筆夫・橋本豊・河野国光・河野政男・河野虎男・久保五月・橋本健・河野和允・諸富和正・溝口晴文などがある。現在は12名で殆んど一野部落である。荷物の保管や経理を1年交替でしている。頼まれて行くのは3〜4月頃に、田染・沓掛・灘手などで、年に3〜6回ぐらいである。戦前は10回以上であった。

三、言儀（俣水神社所蔵文書に拠る。）

俣楽式順

- 第一 祓儀式ハラヒキ 天津祝詞
- 第二 禮樂マシ
- 第三 祭禮サイレイ
- 第四 扇オホギ
- 第五 御幣ミヘイ
- 第六 花神楽ハナカグラ（結開の後半ヲ唱ヘル）

第七 たぶさ 篠神楽サ、カクラ

第八 結開クツカイ

第九 帶四ツオビヨ

第一〇 みさき 荒神と神主

第一一 地割ヂワリ 文撰・四王子・五郎王子

第一二 弓の手ユミテ

第一三 小劍コダ

第一四 岩戸イリト お願申込み祝詞

第一五 白人シラヒト

第一六 手力雄命タテカラノミコト  
柏子神楽ヒヨウシカクラ (事代主尊「ソサ」とも言ふ)

第一七 八重垣ヤエガキ (矛)ホコ

第一八 四つ鬼ヨツオニ 一番鬼・二番鬼は鬼

第一九 大蛇退治オロチケル 素戔鳴尊・足名槌・其外二

第二〇 二番矛ニバンホコ (八重垣)ヤエガキ

第二一 三種神器サンジュノシナギ 思金尊祝詞オモヒガネノミコトノリト

第二二 天鈿女命ウツメノミコト

第二三 戸隱明神トカクシノミヨラシ (岩戸開)ユワトヒラキ ・戸取受・神むかい・戸取とも言ふ

第二四 七五三切リシシメキリ

第二六 神祇上げ

天津祝詞

高天原ニ神留坐ス、神魯岐・神魯美の命以テ、皇御祖ア神伊邪那岐命、筑紫ノ日向ノ橋の小戸の阿波岐原ニ、御ソギ祓ヒ給フ時に、生坐ル破戸ノ大神等 諸々ノ枉事罪穢ヲ祓ヒ賜ヘ清メ賜ヘ、申ス事ノ由ヲ、天津神・国津神・八百萬の神等共ニ、天ノ斑駒ノ耳振立テ聞食セ、ト恐ミ恐ミモ白ス。

花神楽と結開

8 結開

やあ、花かとして折りに来たれど枝もなし

そもそも三五の夜中新月の色ニ千里の外、故人心見るに照る月のこよいど秋の半はなりけり。

結開と花神楽

之より東方を押し奉れば、キノエキノトの方、六万世界追ぎて山あり。山の名をば東山と申す。山の麓に社あらわれては花の結開

参らせる受けの大神受け給ふては、東方の大神やオンソハカ。

之より南方を押し奉れば、ヒノエヒノトの方、七万世界追ぎて山あり。山の名をばナヤ山と申す。山の麓に社あらわれては

花の結開。

参らせる受けの大神受け給ふては、南方の大神やおんそわか。

之より西方を押し奉れば、カノエカノトの方、八万世界追ぎて山あり。山の名をばシャレイ山と申す。山の麓に社あらわれ

ては花の結開。参らせる受けの大神受け給ふては、西方の大神やおんそわか。

之より北方を拝し奉れば、ミズノエミズノトの方九万世界追ぎて山あり、山の名をば西方山と申す。山の麓に社あらわれては花の結開。参らせる受けの大神受け給ふては、北方の大神やおんそわか。

之より中央を拝し奉れば、十万世界追ぎて山あり。山の名をしみせんと申す。山の麓に社あらわれては花の結開。参らせる受けの大神受け給ふては、中央の大神やおんそわか。

10 神主とみさき

神主 なりたかや精静かなる国の内

尚豊なるみこうやの内

荒神を祭しずむるしには

白紙たちて御幣こそする

初花のしげく開けるるりの地に

まをばすまいで我ぞふすなり

みさき 初花のしげく開けるるりの地に

まをばすまいで我ぞふすなり

神主 大阪の関をふさいで道なくば

神主とへよ御幣ささぐる

みさき 大阪の関をふさいで道なくば

野竹持ちたるまるとえかな

神主 ちさの内ちさのろうやにとめおいて

金のくさりでつなぎとめたり

みさき ちさの内ちさのろうやにとめられて

金のくさりをものと思わぬ

神主 すごろくも十五に立てし石なれば

神主とへよ御幣ささぐる。

みさき しらずして打合ひにけりすごろくも

我負けつべし許せ神主

神主 「勿も幸には候へ共、悪気や悪道の道に於ては程近かからう。神道の道に於ては程遠かからう。謹んでご座れ。再幣再配を

持つて御聞せ申さん。謹上再幣再配。当り来る年昭和〇年〇月〇日、当社広前に於て赤きが一人見え候。たんと見ればたんと

かでもなし。動くを見れば八の如し。動かざるを見ればしまこんじんさいの如し。この御こうやの内のみかぶらに修業なすは

何者か。早や早や一句御開きなされ候へ。」

みさき 「一座神命の載に依つて、百八三萬のつば高き高堂へ逃げ下り、悪の想をげんじ人と見えぬぞ道理なり。型は鬼にた

り。されば小王みさきをたそと問べき者は天のまけ。ゆすらかまつた大六天を舞うたりと言へども、よもや我には勝るまい。

今朝はじまる朝倉山の花めぐみ、大ばん石に腰を掛け、日輪かわかかと照り渡り、日元とろとろと少しまどろう。その夢にか

つばと恐ろき候へば、太公・各こ・笛・とびしお十二の具樂を揃へ、入りましを今日としるせば、あやをはえ錦をはえ、神樂

なんぞぞくぞくと踏ませんなどは、もつての外の内や事なり。神主「八せうじんの内をふつつと御許し申さん。」

神主 「神にはみさきと申して御立よりは御勿に候。」

みさき 「我等はほつとく程みこやを御許し申さぬ。」

神主「げにはや万ばんもんばん公神の御宝を奉る。」

みさき「神主より色々宝物とあつて、この荒神に賜り候へ共も、この荒神は一こうにさとりもうさぬ。まず神主にお返し申す。」  
 神主「さて門前は御まよい深く候へ共も、小さい物こそみ宝と用ひ候。この神主の振り立てまつるは、天に於ては十二の駒、  
 我が廟に於ては十二の金のみすゞと申す。之を四方にさつさつと振り舞ひ候へば、御身十六丈に荒れたる姿も五尺の身体とま  
 かりなつて候。」

みさき「御前にてみ神楽をそうし学びを持つて受け奉る。げにげに神主の仰せの如く、此のみすゞを受取り、四方にさつさつ  
 と振り舞ひ候へば、御身十六丈に荒れたる姿も五尺の身体とまかり成つて候。鈴のいこうと一重に存じかへ、神主へ引ぞもの  
 を奉らん。此の公神のついたる杖一ぱいのいんねんをかたらば、夜あけ日のくるべに及ばざる事当家いぬいのすまに納め置き、  
 杖を印にまつりおけば家内安全・諸願成就に御座る。」

〔注〕 氏子代表の場合は「氏子安のん・諸願成就に御座る」とかへる。

### 文撰

カシレンレイケツ ヨロコビキマワリ センシユカ  
 嘉辰令月ノ歎極ナシ。千種萬歳の楽ミ未だ半ナラズヤ。長清殿ノ内ニ春秋ヲ富マシ。不老門ノ前ニ日月遅シ。

君が代は千代に八千代に砂々礼石の

巖と成りて苔の生まで

ツツシシデモウス  
 欽白、天神七代トハ、第一代ハ国常立尊、第二代ハ国狭穂尊、第三代ハ豊斟亭尊、此ノ三代ハ陽神ニシテ父も無ク母も無し。  
 オウリナ  
 無終ノ神ト名附ケテ門満虚無ノ靈性と云フ。又三柱ノ神トモ言フ。第四代ハ泥土煮尊(陽神)・沙土瓊尊(陰神)、男女之ヨ  
 り始マル。第五代ハ大戸之道尊(陽神)・大戸間邊尊(陰神)、第六代ハ面垂尊(陽神)・惶根尊(陰神)、第七代ハ伊弉諾  
 ミコト  
 尊(陽神)・伊弉册尊(陰神)、此ノ神ヨリ陰陽始マル。是レヨリ二柱ノ神ト言フ。

地神五代トハ、第一代ハ天照大神、第二代ハ正哉吾勝天ノ忍穗耳尊、第三代ハ瓊々杵尊、第四代彦火々出見尊、第五代彦波瀲武鸕鷁草不合尊是ナリ。是ヨリ人間世界始メテ人皇始マル。人皇第一代ヲ神武天皇ト奉號マツル。此ノ御代ニ熊野山ヲ建立シ給ヒ、是ヨリ日本影向ノ始メト言フ。其後人皇第十一代ヲ垂仁天皇ト言フ。此ノ御代ニ勢洲伊鈴川ノ端ニ内宮ヲ建テ、大神宮ヲ奉祀ル。其後人皇第二十二代雄略天皇ノ御代ニ、勢洲大原郡宮川ノ端ニ外宮ヲ建テ、大神宮ヲ奉崇ル。然ラバ人皇第十二代成務天皇ノ御代ニ八海道ヲ分ツ。其後人皇第三十九代天智天皇ノ御代ニ、行基神ヲ勅シテ六十六ヶ国ヲ割チ、六十六社社頭ヲ建テ天下ヲ守護ス。然ラバ其ノ先人皇第十四代仲哀天皇ノ御代ニ、異国吾朝を攻ムル時、千珠滿珠ヲ以ツテ異国ヲ退治シ給フ。亦中頃人皇第二十五代武烈天皇ノ御代ニ、蒙古七百余騎ノ鬼国鬼王乱入りテ、信洲高妙山ニ陣ヲ取り、其時天下ノ諸神明馳セ集リテ鬼玉ヲ防グ。鬼王遺根ヲ含ンデ諸国ヨリ乱入ラントスルヲ、東海道ハ関東ヲ渡ル香取明神ト現テ鬼王ヲ防グ。東海道ニ社蒙古ヲ防グ。西海道ハ宇佐・大隅ヲ棟梁トシテ、香椎・箱崎・宇土・霧島鬼王ヲ防グ。北陸道ハ出雲ノ大社鬼王を防グ。夫レヨリ以来天下泰平国土安穩ナリ。然レバ是レヨリ丑寅ニ當ツテ晨旦ト天竺トノ堺ニ山アリ。龍砂葱山、嶺山ト名附山ノ麓ニ川アリ、黄河ト言フ。河ノ端邊ニハ王御座マス。上梵大王ト奉申ル。是レニ門撰博士トテアリ。文撰博士トハ某ノ事ナリ。多年彼ノ川ノ水ノ色ヲ見タリヤ。朝ニハ黄金色、夕ニハ銀金色ニテコソ流レ候カ、彼ノ水俄カニ五色ノ血ニテ別レニ流レ候コソ不思議ナリ。国王大イニ怪ミテ、此ノ水秋津島ニ流レナバ世上愁來ル可シ。文撰來リテ水ノ根元ヲ尋ネ來レト勅使ヲ蒙リ候。其時吾等大伯五印ヲ結デ肩ニ掛ケ、砂利馬ニタクウサンノ鞍ヲ安キ、黄金色ノ靴ヲハカセ、鞭打馳登リ見候処、川上ニ青女ニフクサモノラスマシ居リ候。汝ハ何トテ彼ノ水ヲ穢スゾヤ。急ギスマシ候へ。手水使ツテ梵天歸ラントスル。女人答ヘテ曰ク、我ハ天竺ト申ス女ニテ候。彼ノ水上ヨリ洶リ流レ候得ド自外ニハ候マジ。急キ川トニ登リ見給ヘト申候。問夫レヨリ是迄打登來リ候處、偕テモ王子達ハカ、ル目出度キ滅罪正美ノ叻、甲冑ヲ装ヒ、勇マンク劍ニ勇備ノ相ヲ顯シ給フ事コソ不思議ナシ。去リ乍ラ事ノ旨趣ヲ承ル可キ者ナリ。

償似天地開ケテヨリ以来、清濁分徒毎住万端生本源二世一滴々々大海トス。世界非世界ヲ障為世界ニ東西無ニ方所ヲ南北

ニ定メ、天地ヲ四方に分ツ。四方ヲ八方ニ定メシ為、爰ニ盤古王ノ五王子等所領浮候ヒケルゾヤ。其ノ儀ナラバ能ク能ク心ヲ静メニシテ聞キ給へ。御身ノ父盤古大王ニハ六代ノ師。汝等ニハ七代ノ師匠文撰博士也。其儀ナラバ文撰が計ニテ所領配分仕ラン。

春ノ夜ノ暗ニハ綾ナシ梅ノ花

色コソ見ヘネ綾ハ隠ルル

之ヨリ東方を拝シ奉レバ、東方太郎王子ハ是レヨリ、大圓鐘知淨瑠璃世界六萬六千里ノ拳勳六萬六千余神迄與ヘ奉ル。然ラバ太郎王子ハ青キ王子ニテ御座バ、青キ冠・青幡・御幣・鎧・甲・小手・佩立ノ裝束ニテ、是ヨリ一萬里過キテ里アリ。甲乙ノ郷・寅卯ノ郷ニ住給イテ春ヲ領シ給へ。春ハ横斜梁水邊ニ移シテ委ス。清詭ノ揚漸次是ヨリ初マリ、以前ハ信心堅固ノ心水感應利生月添光テ無一清淨惠葉ニハ委地成就ノ花息ニ開ケ。能ク能ク是ヲ見是レヲ覺ヘ、青キ幡・御幣六十二本ヲ堺ニ差シ七十二日ヲ領シ給へ。下十八日ヲ拔出、題土用と號シ、乙子ノ五郎王子へ與ヘベキモノナリ。定メテ鎮メ奉ル。

夏山ノ木々ノ梢が高ケレバ

空ニテ蟬ノ声ゾ調べル

之ヨリ南方ヲ拝シ奉レバ、南方二郎王子ハ是自平平等性智補陀落世界七万七千里、神ノ拳勳七万七千余神迄與ヘ奉ル。然ラバ二郎王子ハ赤キ王子に御座ハ、赤キ冠・幡・御幣・鎧・甲・小手・佩立ノ裝束ニテ、是レヨリ一萬里過ギテ里有リ、丙丁ノ郷・巳午ノ里ニ住ミ給ヒテ夏ヲ領シ給へ。夏ハ夏天ヲ構殿ノ床ニ入テ招キ、青捐ノ肩ヲ萬葉ヘ、夏天ニハ一生榮花ノ粧地ニ親ミ、本有常住ノ覺月ハ照光明ヘ煩惱ノ暗ミヲ見ルノ覺ベ。ヨクヨク之ヲ見之ヲサトリ、赤キ幡・赤キ御幣六十二本ヲ堺ニ差シ七十二日領シ給へ。下十八日ヲ拔出シ、題土用ト號シ、乙子ノ五郎王子へ與ヘベキモノナリ。定メテ鎮メ奉ル。

秋萩ノ本ノ小草ヲ更ユレバ

色良キ花ノ散ルゾ惜ケレ

コトヨリ西方ヲ<sup>ハイ</sup>拝シ奉レバ、西方三郎王子ハ自是好<sup>コレヨリ</sup>觀察智極楽世界八萬八千里、神ノ拳勵八萬八千余神迄與奉ル。然ラバ三郎

王子曰キ王子に御座マセバ白<sup>サト</sup>冠<sup>サルトリ</sup>・幡<sup>マ</sup>・々々

ノ郷<sup>サト</sup>・申酉ノ里に住ミ給ヘ。秋ヲ領シ賜ヘ。穉<sup>アキ</sup>ハ柱枝<sup>ケイバレンキ</sup>繚碧ノ天ニ寒山ノ清<sup>セイヨウ</sup>詳ヲ覺ヘ、七月ハ杉其ノ影庭妙覺ヘ、三五ノ光輝燈

明ヲ此ノ社前ニ見ル。是覺リ、是ヨリ白キ幡・白御幣六十二本ヲ界に差七十二日ヲ領シ給ヘ。下十八日ヲ拔出、題土用ト號シ、

乙子五郎に與ヘベキモノナリ。定メテ鎮メ奉ル。

冬ハ水双見ガ浦ノ朝水

トケヌ間コソ鏡トハ見ル

之ヨリ北方ヲ<sup>ハイ</sup>拝シ奉レバ、北方四郎王子ハ是ヨリ白成作地マタラク世界九萬九千里、殊ニ神ノ拳勵九萬九千余神ヲ與ヘ奉ル。

然ラバ黒キ王子ニ御座ハ、黒キ冠・黒キ幡・御幣・鏡・甲・小手・佩立ノ裝束ニテ、是白<sup>コレヨリ</sup>リ一萬里過キテ里アリ、壬癸ノ郷・

亥子ノ里ニ住ミ給ヘ。冬ヲ領シ賜ヘ、冬ハ雪霜を<sup>セウワ</sup>残<sup>ダン</sup>蓄<sup>ゾク</sup>ノ窓ニ集メテ、四支ノ限リ智字ヲ知ラシム。故ニ冬ハ<sup>グヤ</sup>殘夜<sup>マド</sup>の窓ニ<sup>ユキ</sup>雪ヲ<sup>モ</sup>積

ル<sup>ツク</sup>顯ニシテ、覺リノ鏡ヲ磨ク。觀念ノ床ニ<sup>シクキク</sup>重却<sup>レクン</sup>三千<sup>レクン</sup>觀<sup>カキ</sup>ノ心薰<sup>カキ</sup>法界ニ。能ク々々是ヲ見是ヲ覺リ、黒キ幡・黒御幣六十二本を界

ニ差シ七十二日ヲ領シ、下十八日ヲ拔出シ、題土用ト號シ、乙子ノ五郎王子ニ與ヘベキモノナリ。定メテ鎮メ奉ル。

北ハ黒南ハ赤シ西白ノ

東風紅ノ染山ノ色

之ヨリ中央ヲ<sup>キナナ</sup>拝シ奉レバ、中央ヲ領スル王子ハ黄成ル王子ニシテ御座ハ、黄ナル冠・黄ナル幡・御幣・鏡・甲・小手・佩立

ノ裝束ニテ、是ヨリ法界<sup>ホウカイ</sup>躰性<sup>レイセイ</sup>智丑<sup>チウ</sup>未<sup>ミ</sup>辰<sup>チン</sup>戌<sup>セ</sup>、殊ニ神ノ拳勵十萬余神迄與ヘ給フゾ。

殊ニ汝ハ四季十八日。是レモ合スレバ七十二日當ルゾヤ。是ヲ領シ給ヘ。外ニハ平吞<sup>ヘイソウ</sup>檣<sup>キョウ</sup>城<sup>キョウ</sup>魔<sup>マ</sup>主<sup>シュ</sup>ニ毒前<sup>ドクゼン</sup>、退<sup>タイ</sup>丙<sup>ヘイ</sup>ニハ持<sup>チ</sup>智<sup>チ</sup>前<sup>ゼン</sup>禪<sup>ゼン</sup>ヲ鎮

本宅都<sup>ホンタク</sup>ヲ心ニ悟<sup>サト</sup>リ、實<sup>ナガ</sup>相<sup>ソウ</sup>ヲ永<sup>エイ</sup>ク新<sup>シン</sup>輪<sup>リン</sup>廻<sup>クワイ</sup>根<sup>コン</sup>塵<sup>ジン</sup>忽<sup>コト</sup>ニ證<sup>セウ</sup>無<sup>ム</sup>性<sup>セイ</sup>自<sup>ジ</sup>遊<sup>ユウ</sup>大<sup>ダイ</sup>寂<sup>シツ</sup>定<sup>テイ</sup>門<sup>モン</sup>ニ給フ可キ者ナリ。謂ニ夫レ五郎王トハ五智五前ヨリ事ニ

依<sup>イ</sup>ッテ曰ク、五王子ヲ生ス故、五人ヘ差別ナク七十日宛配分仕リ候ヘ得共、猶モハヤ不足トアリケレバ謂レナシ、去リナガラ

汝ハ敵王ナレバ、天地得ニ似安々堅ニ潜ニ三際又横ニ渡シ、十方五人ハ五指の如シ。五色ハ五形ニ似タル間、此ノ上ハ配分ヲ終へ去ト言へ共重ネテ申ス。七島凡序六蛇熳房往忘大火を滅シ、三歳ニ一度ノ潤正モ、是ヲ合セバ百二十日ニ当ルゾヤ。是ヲ領シ賜へ。乙子国増トハ汝ガ事ナリ。早ク噴意ヲ浴キ共ニ鎧ヲ脱ギ、著和合忍辱ノ衣ヲモツテ清内外ノ和駐ヲ致シ、扶國土民若ヲ裕ケ、就中今月今日ノ大願成就・息災延命・武運長久、家ニ在リテハ五穀成就・牛馬ヲ庭ニ満シ吉祥如意ナリ。家内安全子孫繁栄ノ壽福ナリ。益々授ケ給フベキモノナリ。

地割大綱

東 大円鐘知淨瑠璃世界 六万六千 青 甲乙・寅卯 春 春の夜の暗には綾なし梅花色こそ見えね綾は隠るゝ 東方太郎王子

南 白平平等性智補陀落世界 七万七千 赤丙丁・巳午 夏 夏山の木々の梢が高ければ空にてせみの声ぞ調べる 南方二郎王子

西 妙觀察知極楽世界 八万八千 白 庚辛・申酉 秋 秋萩の本の小草をさらゆれば色よき花ぞ落ぞ惜けれ 西方三郎王子

北 白成作地真多落世界 九万九千 黒 壬癸・亥子 冬 冬は水双見が浦の朝氷とけぬ間にこそ鏡とは見る 北方四郎王子

中央 法界躰性智 十万 黄 丑未辰戌 四季十八日 北は黒南は赤し西白の東風紅の染山の色 五郎王子

五郎王子

風吹ケバミスマ  
モ動ケドモ

我が羽下ハ萬代ヤ変ラヂ

父梵五代ノ五男ニ乙王ノ五郎王子トハ某ノ事ナリ。父人剣人ニ相ノ王子ニテ御座ス。我体内に宿シテハ日メミヨニテハ世モ

アラダ、ニテコソアルベシ。事無ク片身ノ物ヲ採ラセンヤトテ、大刀劍・小刀劍ソバツバヨツノ劍ヲ取出シ、母キサキニ預ケ置キ、キサキ之ヲ受取り、サラ樟子ノ木ノ本ニ不開ノ箱ニ込メ置キ給フ。我体内紐ヲモトカズ年月ノノ數九月半、日ノ數二百七十五日ト申ス。大法元年丑ノ年丑ノ日丑時ト申ス。三時合セテ七寸ノ劍ヲロニ含ンデ、丑寅枕ニ生レ參ッテ候。其ノ後成長シテ七才ノ時、母上ノ御前ニ參リ申ス様、父ハ今ダ無キヤトテオホセケリ。タトヘココニ候ハンヤトテ、天無クシテハ雨降ラズ。地ナクシテハ草木ハヘン。四方無クシテハ風吹カズ。父無クシテハ種オリン。母無クシテハ生レ參ラズ。形ハ三十二相ト現ジ、上梵上性ノ人ノ子ハ三月腹ニテ耳ヲ聞キ、中梵中性ノ人ノ子ハ五月腹ニテ耳ヲ聞、下梵下性ノ人ノ子ハ九月半ニテ生レ、三歳ニナレバ言ヲヨクヨク言フ知ルト申ス。云ワシヤ我ハ上梵大王ノ子ニシテ御座ス。三月腹ニテ言ヲ受給テ候。アラ恐ロシヤ。王子ノ申事ヤトテ、大刀劍・小刀劍ソバツバヨツノ劍ヲ取り、汝幼クシテ如何デカノウベシ。天ニ向テハ邊事ヲトナヘ、サカラ龍王ノ弟婿ト成リ、始業代ノ飛車ヲ申シ下シ、片道十六年双道三十二年ノ道ト申ス。其ノ車ニ乗テ一里千里百千里九千八海ヲ掛ケ、カンテガ横手が両ト申ス。今朝ノトラノ刻ニトビツキ見候ヘバ、案ニモ疑ワズ四方施設ノ常ガク構ヘ

昔ヨリ神路ニ植エシ結松

今コソトケル神ノ御心

目出度シヤシヤ。兄四人ハ四方四期共ニ打取ラント存ジ候。其ノ時東方太郎王子ハ丈十六丈ノ大蛇トナリ、東ノ海ニ浮ブ。其ノ時南方次郎王子ハ丈十六丈ノ大蛇ト成リテ南ノ海ニ浮ブ。其ノ時西方三郎王子ハ丈十六丈ノ大蛇ト成リテ西ノ海ニ浮ブ。其ノ時北方四郎王子ハ丈十六丈ノ大蛇ト成リテ北ノ海ニ浮ブ。其ノ時某節丈三十二丈ノ大蛇ト成リテ中ノ海ニ浮ブ。ソシテ天神七代・地神五代九州日向國宇土ノ岩屋ニテ延生シ給フ。ソシテ神ノシヨクセイハ彼ノ本國ニタチカヘリ、門戸造作井ヲ堀リ木ヲ植エ釜を塗リ、ロク甲神御トトリナク、イヨイヨ御祭候。

四王子

東方太郎王子

春来れば水も心にまかせけ

やおやらしおは小山田の堰

そもそも父ばん五代の五男に、東方太郎王子とは某しの事なり。あらあら言われなきには候へ共も、文撰博士のおほせかな。之より甲乙方春三月九十日をさへ、今にも不足と存じ候ところ、上七十二日を我等に領じ、下十八日をぬきいざし、乙子の五郎王子にさりぬけよとの詮議こそ、何より持つて言われ無きには候へ共も、七代より此のかた祈りの匠文撰に対し差し許し候。さり乍ら何れの王子にか御たずねなされ候へ。

南方次郎王子

夏山の木々の梢が高ければ

空にて蟬の声ど調べる

そもそも父ばん五代王の五男に、南方次郎王子とは某の事なり。あらあら言われなきには候へ共も、文撰博士の仰せかな。之より丙丁の方夏三月九十日をさえ、今にも不足と存じ候處、上七十二日を我等に領じ、下十八日をぬきいだし、乙子の五郎王子にさりぬけよとのせんじこそ、何より以つて言われなきには候へ共も、七代より此の方祈りの匠文撰博士に対し差し許し候。さり乍ら何れの王子にか御たずねなされ候へ。

西方三郎王子

秋萩の本の小草をさらゆれば

色よき花の散るぞおしげに

そもそも父ばん五代の五男に西方三郎王子とは某の事なり。あらあら言われなきには候へ共も、文撰博士のおほせかな。之

より庚辛の方秋三月九十日をさへ、公にも不足と存じ候ところ、上七十二日を領じ、下十八日をぬきいざし、乙子の五郎王子にさりぬけよとの詮議こそ、何より持つて言われ無きには候へ共も、七代より此のかた祈りの匠文撰博士に対し差し許し候さり乍ら何れの王子にか御たずねなされ候へ。

北方四郎王子

冬は水二見ヶ浦の朝氷

とけぬ間にこそ鏡とは見る

そもそも父ばん五代王の五男に、北方四郎王子とは某の事なり。あらあら言われなきには候へ共も、文撰博士のおほせかな。之より壬癸の方冬三月九十日をさえ、今にも不足と存じ候處、上七十二日を我等に領じ、下十八日をぬきいだし、乙子の五郎王子にさりぬけよとのせんじこそ、何より以つて言われなきには候へ共も、七代より此の方祈りの匠文撰博士に対し差し許し候。さりながら何れの王子にか御たずねなされ候へ。

14 岩戸 お願申込祝詞 (一部使用分押入)

掛巻畏ギ天照大神ヲ初メ、産土大神・八百萬神々ノ御前ニ慎ミ敬ヒ白サク。今月今日ヲ吉日トシテ、此ノ祭屋ニ於テ、大願成就祈願ヲ成ス、諸人等が祈願神ノ恩頼を蒙レリト、稱辭竟奉テ、各自々々公神一座ヲ納メ奉ニ依リ平ケク聞シメセト恐ミ恐ミモ白ス (祈願者氏名奏上)。諸々ノ身ヲ護リ幸ヒ給ヒテ、病ニ罹ル事無ク煩ハズ、身モ片時モ早ク健康ニ成サシメ、生命長ク守リ給ヒテ祈願ノ目的ヲ叶サセ、家内ニ至ル迄災難無ク、家ノ業務モ豊ニテ、弥孫ノ次々弥益々富榮ヘ給ヘト、夜ノ守日ノ守守リ給ヘト、恐ミ恐ミモ祈願奉ラクト白ス。

しばしこそ葉山茂山茂るとも

神路の奥に道はあるらん

そもそも之は白人の大神と申す翁にて候。天照大神は帝王の御先神となり、かたじけなくも國の御主にてまします。天津小  
弼根の命に永く我廟の政治事をもつばらとし賜ふ。

應神天皇のみ代より國家の神命をあげ賜ふ。其後欽明天皇の御代より父母を初め、ひろまく以来大神をあげ賜ふに依り  
ては國の感應一應に聞へたり。日本六十四州に神をあつめ給ふ事凡そ一万三千七百余社なり。しかれば日本は天神七代地神五代  
ノ後、仁應の御代より伊弉諾・伊弉册の命より二神智恵各國御座候に依りては此の國に地無からんやとて、天のさか鋒差し下  
し海平の海を深り給ひき。上げ見給へば鋒の雲落ち固りて島と成り候。我國の大海は大日の神の御ふんあり。其れ父母流風の  
類層なり。此の下に地無からんやとて、天の浮橋の上に夫婦わこわり御子四人出来候。されば日神・月神・惠美神・素戔鳴尊  
と申す。天照大神は天の岩戸に御こもりなされ候程にて、内示所と申すに鏡を掛け榊木の枝を手折りうつほの鈴を結び着け、  
四方にさつさつと振り奉れば、神命は集り切りつそらそらの舞をまひ給う。

榊ばや立ち舞ふ袖の追風に

なびくは神の心なり

かくえいじ賜へは、神命等は太玉の明神を呼び出し日本を明かになさばやと存じ候。  
手力王の尊早やく御いでなされ候へ。

## 16 手力雄命

いなずまや光に行くやはるかにて

はるかに照らす雲に掛橋クモ カケハシ

月蔭ツキカゲやさすにまかせて行く舟も

あかしが浦に止まりなるらん

只今ただいま此ここともとに手力雄命テカラノミコトノミコと仰せられ候は如何なる神名にて御あしませ候や。

白人オホシロ「之これは白人オホシロと申す翁オキナにて候。天照大神は天の岩戸に御籠りなされ候に依つて、岩戸の御前に詮議センギものがたりなされ候へ。」

それ外ほかに天アマのしゆまにつき、天地開闢テニチカイヒクより此この方カタ、八代よろずの神等は皆大神宮のおなごれ國の肇月のはせうたりとい

えども、豊葦原トヨアシハラみずほの國と申して、天地のみようかいほつの自然限りなし。神ぎとはこの事にて候。今後コノチさつたの中に映じ

給ふとや言々。我等も岩戸の御前にて一囀ヒトハヤし舞マふするにて候。神サカキはや大神宮に献タテマツじ奉る。

## 17 事代主尊(ソサ)

かき流す大山本の五十鈴川イヌス

やを萬代の誓ヨロスヨひなりけりチカ

只今此もとに事代主尊コトシロノミコと申し候は如何なる神名にて候や。

白人オホシロ「これは白人オホシロの大神と申す翁オキナにて候。それ天照大神宮は天の岩戸に御籠りなされ候に依つて、岩戸の御前にて詮議センギ物語モノガタリなされ候へ。」

又また一女二男と申奉る事コト、第一天照大神宮、第二月讀ツキヨミ尊ミコト、第三西の宮惠美寿三郎エベスと申すは之なり。第四出雲大社とは某ソノの事

なり。十月たよこくにてはかみなし月とは申し候へ共、出雲の國に限りなし。じんざい月とはこの謂イハレ。又此所ココに二神ニシおぼしめ

し候事何イハル如なる事にて候や。長寿國家チヨウヨクノカミの小廟コノミヤ和合ワガフ三千七百余社ヨシヤなり。かるが故ユエに神名等カチの方辨ホウベンに依りヨ一首遊イツユアばし、

しばしこそはやましげやま茂シゲければ

神路の奥に道はあるらん

かく詠じ賜えば、夜の間の一つの石五つうまれ、此の島の石に苔生しかゝければ、  
朝日差す夕日の石に影見えて

我がなす仇を唯か知るらん

かるが故に宝にはますみの鏡・草なぎの劔・八坂瓊女玉・うつほの鈴を榊の枝に結び付け、大神宮ノ目前の海にそうりと入  
れさせ賜ふによりては、もそゝすゝかせ賜ふに依つては、めも注がばと申なり。かるが故に神のみ宝・ますみの鏡・草なぎの  
劔・八坂瓊の勾玉三種の神器之なり。ますます我等も岩戸の御前にて一かな小舞ふするにて候。

### 18 八重垣

神風やさもあらねば吹く悪魔もかわじと知る。

「去る程に檜の川上に立ち入りて見候へば、宮人二人いめよき姫を中に置きましたし候は何如なる神名にて候や。」

「我は國津神大山主の子なり。我が名をば足名槌、姫の名おは手名槌、姫の名をば久紫稲田姫と申す。近き頃此の處に八又  
の大蛇と申す大蛇住み候て、夜毎に出ては人を食し、今又姫が前と申すに依つて之を傷臆仕り候。」

「其の姫を我にやさせなば、石舟を造り一千石の毒酒を入れ、其の上に柵を掛け姫を居き、姫の面影を酒に撮し相待つ處に  
夜半過ぎ大蛇岡に出で、言傳へたる毒酒少しも残さず飲み残し酔伏したる處、彼の洋劔を取り出し、づたづたに切り候へば、尾  
骨に当りて切れる尾を長さにたちさき見れば、天の叢雲の劔なり。」

### 19 四つ鬼

一番鬼 「そもそも我は鬼王國に住む太郎王子にて候。今度天照大神は天の岩戸に御籠り候に依つて、四方八方鬼人を動かし、  
日本を我がまゝになさばやと存じ候。東方に鬼人はないか。南方に鬼はいないか。如何も南の海に住ひする竹丸はいないか。

早や 御いでなされ候へ。」

二番鬼 「そもそも我は南の海に住ひする竹王丸にて候。今度天照大神は天の岩戸に御籠り候程に、四方に鬼人は居ないか。鬼は居ないか。そもそも御いでなされ候へ。」

一番鬼 「それ天照大神は天の岩戸に御籠りなされ候に依つて、日本は真黒となつて候程にゆらゆら遊覧仕まつるう。」

一番鬼 「そらこそ神風がそよそよそよ吹き来つて候。鬼の心が淋しくなつて候。我が本国へ立ち歸つて候。」

## 20 大蛇退治 素戔鳴尊・足名槌

八雲立つ出雲八重垣妻、込めて

八重垣作る其の八重垣を

只今此所もとに宮人二人いめよき姫を中に置きましまし候は如何なる神名にて御座候や。

足名槌 「我は國津神大山主の子なり。我名をば足名槌、姥の名をば手名槌、姫の名をば久紫栢田姫と申す。」

「貴神等の愁みは何事にて候や。」

足名槌 「近き頃此の所に山田の大蛇と申す大蛇住み候て、夜毎に出ては人を食し、今又姫が前と申すに依つて、之を傷騰仕り候。」

「其の形は如何にて候や。」

足名槌 「身一つにして頭八つあり。七尾七谷にまたがり、其の背見れば杉の木・檜を生じ、其の腹見れば毎々く違ひ互に存じ候。」

「其の姫を我にやさせなば、一千石の毒酒を作り石舟に入れ、柵を構へ姫を置き姫の面影を毒酒に寫し、彼の大蛇を退治仕らん。出雲の國松納言現毒酒の酒早や御持ちいでなされ候や。」

「今我天より降りし時、檜の川上なる取込みの所に下りし時、十つかの劔を持って山田の大蛇を切りはぐり見れば、我が刀先

少し缺けたり。あやしみ中の尾たちさき見れば天の叢雲の劔なり。こは蜜かに持ちかはるもかしこければ大神宮に納め置き、永久く天が下の守護となし奉らん。

## 21 二番矛

奥津城にすめ神等を齋ひ来し

心は今ぞ樂しかりける

さる程に玉の彌の尊は天の角山の採金り八坂瓊勾玉を造り、石氷止尊は八咫鏡を造り給ふ。素戔鳴尊は八又の大蛇を退治給ひ、叢雲の劔を採り出す。之れ三種の神器と言ふ。地神第三代瓊々杵の尊より人皇第一代神武天皇に受け継がる。垂仁天皇の御代に勢洲五十鈴川の端に内宮を建て、倭姫をしてまつり給ふ。景行天皇の御代に日本武尊をして、叢雲の劔の威徳を以つて、賊を平定給ふ。されば尾張の國熱田の宮に納め置き、永々く天が下の守護となし奉る。

## 22 三種の神器 (23天鈿女命入)

白人「思金の尊早々御出なされ候。」

思金「篠の葉に雪降りつもる冬の夜に

豊の遊をするが樂しき

只今此所もとに思金の尊と仰せられ候は如何なる神命にておわしまし候や。」

白人「今度天照大神は天の岩戸に御宿り候に依つて、岩戸の御前にて詮議ものがたりなされ候へ。」

思金「奈けなくも國の御先神御主にてまします天照大神は、天の岩戸に御潜め候に依つて、五社七社十二社の神命をあがめ、

大神宮のみ心を和らぎ奉る。」

思金「太玉の明神早々御出なされ候へ。」

太玉「梓弓春来る毎にすめ神の

豊の遊に逢わんとぞ思ふ

只今此所もとに太玉の明神と仰せられ候は如何なる神命にて候や。」

思金「われ思金の尊にて候。今度天照大神は天の岩戸に御宿りなされ候に依つて岩戸の御前にて詮議物語りなされ候へ。」

太玉「我先に天の角山を下る時、真神の枝を手折り、青新手、白新手を結び着け大神宮に献じ奉る。」

思金「玉の彌の尊早や／＼御出でなされ候へ。」

玉の彌「齋ひ来し神は祭りつ明日よりは

組の緒垂でて遊べ太刀佩き

只今此所もとに玉の彌の尊と仰せられ候は如何なる神命にて候や。」

思金「(受け前に同じ)」

玉彌「我今度天の角山の金を採り、八坂瓊勾玉を造りしに依り、忝けなくも大神宮に献じ奉る。」

思金「石ごり止めの尊早や／＼御出でなされ候へ。」

石ごり止「奥津城にすめ神たちを齋ひ来し

心は今そ樂しかりける

只今此所もとに石ごり止めの尊と仰せられ候は如何なる神命にて候や。」

思金「(受け前に同じ)」

石ごり止「我今度天の角山の金を採り、八咫鏡を作りしに依り、大神宮に献じ奉る。」

思金「素戔鳴尊早や／＼御出なされ候へ。」

素戔鳴「八雲立つ出雲八重垣妻込めて

八重かきつくる其の八重垣を

只今素戔鳴の尊と仰せられ候は如何なる神命にて候や。」

思金「(受け前に同じ)」

素戔鳴「今我天より降り、綯の川上なる取込みの所を下りし時、十つかの剣を以て山田の大蛇を切り、はぐりて見れば我刀

先少し欠けたり。あやしみ見れば天叢雲劍なり。こわ蜜かに待ちはべるもかしこければ、尾張の國熱田の宮に納め置き、永く

天が下の護りとなし奉る。三種の神器之なり。」

思金「天鈿女命早や／＼御出でなされ候。」

天鈿女「かき流す大山本の五十鈴川

八代萬代の小山田の堰

只今此所本に天鈿女命と仰せられ候は如何なる神命にて候や。」

思金「(受け前に同じ)」

天鈿女「謹上再幣再配。うずの廣前に於て、しかも一生の单礼をぬきんじて、さんごうそうの志將徳えんまの人を知り、書物

無くして傳命なくして天津神天の岩戸の御前にて一囃子なりと舞ふばやにて候。」

思金尊祝詞

掛卷モ畏ギ、人日本ノ國ヲ知召シ、言靈ノ天照國ニ三種ノ神寶ヲ降シ給テ、天津日嗣の高御座は、千代萬代ニ勅ク事無ク變  
宜無ク、修理固成給フ。天下四方ノ國ニ生出シ、青人草等ノ身魂ニ、天津神ヨリ授ケ給ヘル、直靈魂ヲシテ、益々光華明彩至

喜<sup>キ</sup>、直伊都能賣魂<sup>イヅノノメマ</sup>ト成<sup>ナ</sup>サシメ給<sup>メ</sup>ヘト、此<sup>コノ</sup>祭屋<sup>マツリヤ</sup>ニ鎮祭<sup>シタマフツ</sup>ル、御靈<sup>ミタマ</sup>ノ御前<sup>ミマヘ</sup>ヲ慎<sup>ツツシ</sup>ミ敬<sup>イママイ</sup>白<sup>マス</sup>ス。國家<sup>イエ</sup>ニモ民<sup>マゴフ</sup>ニモ桎<sup>アラ</sup>事<sup>セズ</sup>有<sup>マモリ</sup>セズ、夜<sup>ヨ</sup>ノ守<sup>マモリ</sup>リ日<sup>ヒ</sup>ノ守<sup>サ</sup>リ、幸<sup>サチ</sup>宇豆那比<sup>ウズナヒ</sup>給<sup>メ</sup>ヒテ、彌<sup>イヤヒ</sup>係<sup>ケ</sup>ノ次<sup>ツギ</sup>々<sup>ツギツギ</sup>ニ令<sup>サカズラフ</sup>榮<sup>ワカ</sup>賜<sup>タマフ</sup>ヒテ、息<sup>イソナカ</sup>内<sup>ナ</sup>長<sup>ナガ</sup>ク御祭<sup>ミマツ</sup>リ善<sup>ツカ</sup>ク仕<sup>シ</sup>ヘ奉<sup>マツ</sup>ラシメ給<sup>メ</sup>ヘト、畏<sup>オソ</sup>ミ恐<sup>コソ</sup>ミ祈願<sup>ノリガン</sup>奉<sup>マツ</sup>ラクト白<sup>マス</sup>ス。

### 23 天鈿女命

天鈿女<sup>アメノメノコ</sup>「かき流<sup>ナガ</sup>す大山<sup>オホヤマ</sup>本<sup>ノ</sup>の五十<sup>いそ</sup>鈴<sup>すず</sup>川<sup>カハ</sup>」

八代<sup>やうだい</sup>萬代<sup>まんだい</sup>世<sup>よ</sup>の小山<sup>おやまだ</sup>田<sup>た</sup>の堰<sup>せき</sup>

たゞ此<sup>こゝろ</sup>所<sup>ところ</sup>本<sup>もと</sup>に天鈿女<sup>アメノメノコ</sup>命<sup>のみこと</sup>と仰<sup>おほ</sup>せられ候<sup>まう</sup>は如何<sup>いか</sup>なる神<sup>しん</sup>名<sup>な</sup>にておわしまし候<sup>まう</sup>や。」

白人<sup>しろひと</sup>「之<sup>これ</sup>は白人<sup>しろひと</sup>の大神<sup>だいじん</sup>と申<sup>まを</sup>す翁<sup>おきな</sup>にて候<sup>まう</sup>。今<sup>いま</sup>度<sup>たび</sup>天照<sup>アマテラス</sup>大神<sup>だいじん</sup>は天<sup>あま</sup>の岩<sup>いわ</sup>戸<sup>と</sup>に御籠<sup>おんこも</sup>りなされ候<sup>まう</sup>に依<sup>よ</sup>つて、岩<sup>いわ</sup>戸<sup>と</sup>の御前<sup>おんまへ</sup>にて詮議<sup>せんぎ</sup>物語<sup>ものがたり</sup>なされ候<sup>まう</sup>へ。」

天鈿女<sup>アメノメノコ</sup>「謹<sup>キンジヤク</sup>上<sup>サマヘ</sup>再<sup>イマ</sup>幣<sup>ハヒ</sup>再<sup>イマ</sup>配<sup>ハイ</sup>、うずの廣<sup>ヒロ</sup>前<sup>マヘ</sup>に於<sup>おい</sup>て、しかも一<sup>イツ</sup>生<sup>セウ</sup>の單<sup>タン</sup>禮<sup>レイ</sup>をぬぎんじ、さんごうそ<sup>コゴタレ</sup>うの志<sup>シ</sup>せうとくえんま<sup>ンマ</sup>の人<sup>ヒト</sup>を知<sup>シ</sup>り、書<sup>シヨ</sup>物<sup>モノ</sup>無<sup>ム</sup>くして天津<sup>テンジン</sup>神<sup>カミ</sup>天<sup>アメ</sup>の岩<sup>いわ</sup>戸<sup>と</sup>の御前<sup>おんまへ</sup>にて一<sup>イツ</sup>噓<sup>ソウ</sup>子<sup>コ</sup>なりと舞<sup>マウ</sup>ふばやにて存<sup>ゾン</sup>じ候<sup>まう</sup>。」

### 24 戸隠明神(戸取)

戸取<sup>トトリ</sup>「しばしこを葉<sup>は</sup>山<sup>やま</sup>茂<sup>も</sup>山<sup>やま</sup>繁<sup>は</sup>ければ

神路<sup>カミヂ</sup>の奥<sup>おく</sup>に道<sup>みち</sup>はあるらん

只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>此<sup>こゝろ</sup>所<sup>ところ</sup>もとに戸<sup>と</sup>隠<sup>かく</sup>の明<sup>あき</sup>神<sup>かみ</sup>と申<sup>まを</sup>す候<sup>まう</sup>は如何<sup>いか</sup>なる神<sup>しん</sup>明<sup>めい</sup>にて候<sup>まう</sup>や。」

白人<sup>しろひと</sup>「之<sup>これ</sup>は白人<sup>しろひと</sup>の大神<sup>だいじん</sup>と申<sup>まを</sup>す翁<sup>おきな</sup>にて候<sup>まう</sup>。以<sup>い</sup>前<sup>ぜん</sup>より五<sup>イツ</sup>社<sup>シャ</sup>七<sup>シチ</sup>社<sup>シャ</sup>十二<sup>ジュニ</sup>社<sup>シャ</sup>の神<sup>かみ</sup>明<sup>めい</sup>等<sup>ら</sup>ちが集<sup>あ</sup>りて、切<sup>キ</sup>りつさ々<sup>ツツ</sup>の舞<sup>まい</sup>を奏<sup>そう</sup>し賜<sup>たま</sup>へ共<sup>ども</sup>、今<sup>いま</sup>に岩<sup>いわ</sup>戸<sup>と</sup>の戸<sup>と</sup>も開<sup>ひら</sup>き候<sup>まう</sup>らん<sup>に</sup>依<sup>よ</sup>つて、信<sup>シヤノ</sup>濃<sup>のう</sup>の國<sup>くに</sup>戸<sup>と</sup>隠<sup>かく</sup>の明<sup>あき</sup>神<sup>かみ</sup>を勸<sup>かむ</sup>請<sup>じゆ</sup>致<sup>いた</sup>し、岩<sup>いわ</sup>戸<sup>と</sup>の御前<sup>おんまへ</sup>にて詮議<sup>せんぎ</sup>物<sup>もの</sup>語<sup>ご</sup>なされ候<sup>まう</sup>へ。」

戸取<sup>トトリ</sup>「それ本<sup>ほん</sup>に戸<sup>と</sup>取<sup>と</sup>とは覺<sup>かく</sup>悟<sup>ご</sup>の神<sup>かみ</sup>門<sup>もん</sup>なり。又<sup>また</sup>ある時<sup>とき</sup>は參<sup>さん</sup>謀<sup>ぼう</sup>のみさき。静<sup>しず</sup>なる時<sup>とき</sup>誠<sup>まこと</sup>の身<sup>み</sup>体<sup>た</sup>とまかり成<sup>な</sup>つて候<sup>まう</sup>。今<sup>いま</sup>日<sup>ひ</sup>こい<sup>こ</sup>い<sup>こ</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>所<sup>ところ</sup>

に立入り、岩戸の戸を取り四方の世上に光をやさせばやと存じ候。」

戸取「谷は八つ峯は九つ戸は一つ

鬼が住むとや荒なきの里」

白人「ちはや降る天の岩戸に籠れ共

心は空に有明の月」

戸取「月は露露は草木に宿れ共

消ゆれば本の宮ぎぬの葉」

白人「榊葉や立ち舞ふ袖の追風に

なびかぬ神はおわしますらん」

戸取「榊葉や立ち舞ふ袖の追風に

なびくは神の心なり」

白人「千早降る天の岩戸に袖かけて

舞へば戸開く天の岩戸

去る程に大神宮のみ心も和らぎ、岩戸の戸も小めに開き賜ふに依って、まずまず励みを出し、岩戸の戸を取り四方の世上に光をやさせばやと存じ候。」

## 26 神上げ

一、宮地以外は心ずメ切り後神上げをする。

二、骨を上げ土地の上に拝敷を敷き、其の上にて行ふ。

三、三人にて中央は色もの着け、兩人は白衣を着けよぼしを着け、中央は門撲のよぼしを用ゆ。

四、三人共膳に米を少し入れ、三人ならんで順に二回逆一回廻りし後、米を四方に撒く。

五、更に膳を置き、両方の二人は御幣を持ち、中央は何も持たず衣の中にて手の指を組み、東方に向つて中央の人心の内となゆ。此の間兩人御幣を振りて三拝する。三回となゆ。

六、更に東方終りし後、南方・西方・北方・中央に拝する。

七、となえ方左の通り。指を組みてかしわ手を二回たゝいて一拝する事三回。「東方の神は東方へ鎮まり給へ」心の内で三回となゆ。

八、右終りし後、兩人一枚の拝敷を両端より巻き、拝敷のみを二人で持つて居る上を三回、中央の色衣を着けた人が乗り越る。

九、拝敷を上げた土地を中央の人蹴にて三蹴掘りて神上る。